

氏 名 : 秦 希久子  
学 位 の 種 類 : 博士 (学術)  
学 位 記 番 号 : 博乙第 5 号  
学位授与の日付 : 平成 31 年 3 月 18 日  
学位授与の要件 : 東京家政大学学位規程第 3 条第 3 項該当  
人間生活学総合研究科  
学位論文題目 : 在宅で生活する脊髄損傷者の食関連 QOL 向上を目指した健康  
づくりのための食環境整備に関する研究  
論文審査委員 : (主査) 教 授 岡 純  
教 授 半澤 嘉博  
教 授 峯木 眞知子  
准教授 小林 理恵  
教 授 稲山 貴代 (長野県立大学)

### 論文内容の要旨

【背景】健康づくりの場や食環境の整備を進めるには、地域に暮らす障がい者も含めて考える必要がある。「自分は健康である」と考えている障がい者が生活の質を高く保つ生涯を送ることは、社会経済的な意味だけでなく、地域のあるべき姿にもつながる。

【目的】在宅で生活する脊髄損傷者（以下、在宅脊損者）を対象に健康づくりにおける栄養・食生活の最終目標となる食関連 QOL の良好さに関連する食環境整備に必要な要因を栄養・食生活の理論枠組みを用いて明らかにすること。

【研究課題 1】食生活満足度に関連する食物摂取状況・行動・食環境の要因

【目的】食関連 QOL である食生活満足度と行動・ライフスタイル（食物摂取状況，行動），環境（食環境）との関連を明らかにすること。

【方法】社団法人全国脊髄損傷者連合会の登録会員 2,731 名を対象に，2011 年 9 月郵送法による自記式質問紙調査を実施した。調査票は QOL（食関連 QOL），食物摂取状況，行動，食環境を含む 8 つの概念で構成した。回答が得られた 1,000 名（回収率 37%）のうち 853 名を解析対象とした（有効回答率 31%）。従属変数は食関連 QOL である「食生活満足度」とし，独立変数を「食物摂取状況」，「行動」，「食環境」として二項ロジスティック回帰分析にて単変量解析と多変量解析を行った。

【結果】食生活満足度と関連がみられたものは，食物摂取状況では「緑黄色野菜」と「いも類」，行動では「自分の健康のために栄養や食事に気をつけている」，「家族や仲間と食事や料理，栄養の事を話す」，「健康診断受診有無」，食環境では「健康づくりに家族や周囲の人は協力的」，「食生活について一緒に考える仲間の有無」，「よく利用する食料品店や外食店で栄養バランスの良い食品やメニューを得ている」であった。

【結論】食生活満足度はコミュニケーション構築も含めた食環境整備により良好となる可能性があることが示された。

【研究課題 2】

2-1 食生活満足度および主観的健康感と社会参加/周囲からの支援との関連

【目的】食生活満足度および主観的健康感と社会参加および周囲からの支援との関連の相違と相乗効

果を確認すること。

【方法】研究課題 1 の調査より、40 歳以上の男性 646 名を解析対象とした（有効回答率 23.6%）。主観的健康感、食生活満足度を従属変数とし、周囲からの支援と社会参加およびこれらの組合せを独立変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。相乗効果の有無は交互作用検定を実施した。

【結果】組合せの関連では、支援あり/参加ありにおいて主観的健康感、食生活満足度が高かった。支援あり/参加なしにおいても食生活満足度が高かった。周囲からの支援と社会参加の相乗効果はみられなかった。

【結論】周囲からの支援と社会参加の双方があることが最も望ましいが、食生活満足度は社会参加がなくても周囲からの支援があることで良好であり、主観的健康感では、周囲からの支援がなくても社会参加があることで良好であった。

## 2-2 食行動および食行動の中間・準備要因と社会参加/周囲からの支援との関連

【目的】食に関する行動、中間要因、準備要因と周囲からの支援および社会参加との関連の相違と相乗効果を確認することを目的とした。

【方法】食に関する行動（6 項目）、中間要因（行動変容段階 2 項目）、準備要因（7 項目：結果期待 2 項目、セルフ・エフィカシー 2 項目、食スキル 3 項目）をそれぞれ従属変数にし、研究課題 2-1 と同様の解析を実施した。

【結果】組合せでの関連は、支援あり/参加ありにおいて食に関する行動、中間要因、準備要因が良好であった。また支援あり/参加なしでも食に関する行動、中間要因、準備要因が良好であった。周囲からの支援と社会参加の相乗効果がみられた変数は 1 項目のみだった。

【結論】周囲からの支援と社会参加の双方があることが最も望ましいが、食生活においては、社会参加がなくても周囲からの支援があることで良好となることが示された。

### 【研究課題 3】健康関連 QOL/食生活満足度と食環境認知との関連

【目的】健康関連 QOL（身体的および精神的サマリースコア）/食生活満足度と食環境認知との関連を検討し、食環境整備でフォーカスする要因を明らかにすること。

【方法】社団法人全国脊髄損傷者団体連合会の登録会員 2,007 名を対象に、2015 年 8 月、郵送法による自記式質問紙調査を実施した。調査票の項目は、属性、健康関連 QOL の尺度である SF-8、食生活満足度、食環境認知 8 項目とした。506 名を解析対象者とした（有効回答率 25%）。従属変数は SF-8 の身体的および精神的サマリースコアと食生活満足度とした。独立変数は食環境認知とし、二項ロジスティック回帰分析にて単変量解析（モデル 1）と多変量解析（モデル 2, 3）を実施した。モデル 3 では食環境認知を食物へのアクセスと情報へのアクセスに分けて投入した。

【結果】モデル 3 では身体的および精神的サマリースコアで共通して関連していたのは食情報へのアクセスの「地域での食情報入手」であった。食生活満足度で関連していたのは、食物へのアクセスは「家庭内での栄養バランスの整った食事がとれる状況」、食情報へのアクセスでは「家族や仲間からの健康や栄養情報入手」、「マスコミからの正しい健康・栄養情報入手」であった。

【結論】健康関連 QOL/食生活満足度と関連した食環境認知は一致しなかった。食環境を評価する場合、食生活満足度および健康関連 QOL 両者とも評価する必要がある。

【総合考察】障がい者を対象に、健康関連および食関連 QOL を用い、食環境整備の要因を検討した初めての知見である。栄養・食生活を包括的に評価できる理論枠組みを用いた食生活要因の関連検討は、障がい者の健康づくりの促進に貢献できる可能性がある。本研究は実践現場での健康づくりの介入企画や行政および自治体等での健康づくりや食環境整備の基礎資料として活用できると考える。

## 論文審査の結果の要旨

本論文の目的は、在宅脊損者を対象に健康づくりにおける栄養・食生活の最終目標となる食関連 QOL の良好さに関連する食環境整備に必要な要因を栄養・食生活の理論枠組みを用いて明らかにすることにある。

本論文は、在宅脊損者を対象に、健康関連 QOL、食関連 QOL を用い、食環境整備の要因を検討したものである。障がい者の生活改善を図るために、健康面での環境改善を考えていくことは極めて重要である。特に、食生活のあり方は大きな要因であり、その実態や課題に関しての先行研究も少なく、在宅で自立・自律した生活を営む障がい者を対象とした全国規模でのヘルスプロモーション研究は日本では初めてであり、本論文著者の研究のオリジナリティは高く評価できる。最終的にこれらの研究は、国際誌 2 報（いずれも Spinal Cord）、国内誌 2 報（いずれも栄養学雑誌）で発表されており、国内外において、日本の障がい者の栄養・食生活研究のプレゼンスを示すことに貢献している。栄養・食生活を包括的に評価できる理論枠組みを用いて健康/食関連 QOL と食生活の要因関連を検討したことから、健康づくりの促進に貢献できる可能性がある。横断研究であるという限界はあるものの、障がい者、特に在宅脊損者の健康づくり施策を立案する上で、何が重要課題であるかを抽出し、施策実施による評価判定要素をどう定めるかを見出す糸口的な研究として価値がある。今後、実践現場での健康づくりの介入企画プログラムのための資料としての活用、自治体等への食環境整備の取り組みの提案が期待される。

上記の観点から、本論文はその研究課題の設定、研究手法の適正さ、研究結果の評価、総括的議論において、審査員の総意をもって博士論文の内容に足るものと判断する。